

## 鑑賞学実践研究 1

— ティツィアーノ作「三世代の寓意」—

吉川 登・野上 雅志\*

## The Case Studies in the Science of Appreciation of Art 1

— Tiziano's "L'Allegoria delle Tre Età della Vita" —

Noboru YOSHIKAWA and Masashi NOGAMI\*

(Received September 3, 2001)

### 1 はじめに

鑑賞学とは、美術に関する様々な理論的研究と小・中・高校での授業実践とを融合させることによって、美学美術史でもなく美術教育学でもない、専門的であると同時に実践的な、美術教育における新領域を拓く試みである。それはいわば美術教育分野における「教育実践学」であるが、「教育実践学」とは、近年、教育学部の基幹的部分を構成すべき領域として期待されているものである。「西洋美術史」や「美術概論」を大学で学んでも、実際に学校教育の現場で教壇に立ったとき、それらの知識が直ちに役に立つとはいえないが、「鑑賞学」は有用性と即効性を旨とする実践学なので、すべての学校教師は「鑑賞学実践研究」の成果をそのまま教室で使うことができる。

「鑑賞学」の授業の特色は、鑑賞「行為」を重視するという点にある。鑑賞行為は、「見る」「知る」「考える」からなる。鑑賞者は、この一連の行為から自分なりの鑑賞結果を導き出すことができる。「見る」ことで得られた視覚的データを、「知る」ことで得られた多様な情報とつぎあわせて画像＝視覚的テキストを読み、画像の意味作用を多様な視点から「考える」のである。このように、「行為」としての鑑賞の授業には、「見る」「知る」「考える」のそれぞれの段階での訓練が必要となる。

「見る」段階では、直観・分析・統合という一連の過程を通して「緻密に見る」訓練を行う。「知る」段階では、情報源としての書籍・パソコン・教師等を利用することによって、(画像情報を含む)多彩な情報を収集する訓練をする。そして、「考える」段階では、考えるための道具としての多様な方法論の学習を前提にしつつ、情報を編集し一定の解釈形を提示する訓練をする。

本研究では、こうした「鑑賞学」の基本方針に沿って、小学校中学年(3・4年)向きの題材と方法を用いて授業実践を行い、授業結果を分析した。

---

\* 熊本県阿蘇郡高森町立上色見小学校教諭

## 2 小学校中学年における「見る」ことを主体とした鑑賞の授業

### (1) 「見る」「考える」学習過程

鑑賞教育において、学習者の発達段階を考慮した「系統性」は必要不可欠である。鑑賞学が考える系統性は「行為」を軸としたもので、小学校に関しては、これを大きく3つのグループに分けて考える。

#### ①小学校低学年

「見る」段階への導入としての「鑑賞遊び」を行う。遊びを通して画像になじみ、画像に対する抵抗感を取り除く。水泳を教える前に水になじませるようなもの。

#### ②小学校中学年

「見る」段階に重点を置き、「見る」から直ちに「考える」へと移行する。「見る」から「考える」という流れである。ここでの「考える」ための情報源は、児童の実生活から得られた知識に限定される。主眼点は「見る」ことを充実させることにあり、原則として画像に関する知識を与える必要はない。

#### ③小学校高学年

最小限の「知る」段階の導入を行うことによって、「見る」「知る」「考える」の一連の鑑賞行為により鑑賞を行う。画像について「考える」ことを促進させるような適切な量の知識を、精選して与える。

上述の方針に従って、本実践における鑑賞授業においては、「見る」から「考える」という展開を軸に、「見る」段階を重視する。小学校中学年の児童では発達段階からして、作品の背景にある様々な情報を理解・分析・整理することはまだ難しいと考えられるので、この授業を、主として「見る」段階を訓練するためのものとした。従って本実践では作品について考えるための必要最小限度の情報を与える。また、「考える」段階は設定するが、それほど本格的な意味解釈を求めるのではなく、視覚分析で得られたことを元にした範囲での児童なりの作品解釈を行わせる。

### (2) 児童に作品をよりよく視覚分析させるための工夫

#### ①視覚分析しやすく、児童が興味を持って取り組めるような題材の選択

名画の鑑賞の授業を初めて受ける中学年の児童にとっては、視覚的な分析が十分にでき、最後まで興味を持って取り組めるような作品を取り上げなければならない。そのためには一見すると何の変哲もないようでも、画面のあちこちに多様なモチーフが散りばめられた作品、しかも各モチーフを一つ一つ分析していくとやがてはそれらがつながり、何らかの意味生成ができるような作品が題材として有効である。本実践では、ティツィアーノの「三世代の寓意」を取り上げた。この作品には、題名が示す通り人生における三つの世代を表す寓意的人物群が三角形に配置されている。一見すると、牧歌的な雰囲気のある作品であるが、モチーフを一つ一つ切り分けてみるとたくさんのことが分かってくる。児童にとっては興味を持って視覚分析できる作品である。

#### ②作品の細部にわたる分析をさせるための発問

児童は作品に出会ったとき、まずは作品の全体的印象を享受する。ここでは「なんとなく暗い」というような漠然とした作品の全体的印象か、「後ろの人は何をやっているのだろう」というような気になる部分に対する疑問などが出されることになる。そして次の段階では、作品の主

題につながる視覚的な分析が必要になってくる。ここで、指導者の方から一定の視点の元に発問を行う。発問に対する答えを考え、話し合ううちに少しずつ主題に迫る。本実践では、画面に示されているそれぞれの寓意的人物の行為等の意味に関して発問を行い、表情・しぐさ・持ち物等の分析を行わせる。

### ③児童が作品をよく見るための工夫

児童が作品観察を十分に行うためには、分析する作品図版が手元にあり、手にとって納得できるまで見るができることが大切である。また自分が分析した結果をワークシートに書き記し自分の考えを纏めたり、他の児童と話し合ったりすることによって、より深い分析が可能となるので、そのような活動が円滑に行えるような環境整備に対する配慮が必要である。

## 3 授業実践例ーティツィアーノ作「三世代の寓意」

これより本研究における授業実践を提示する。本実践に関する詳細は以下の通り。

日 時：平成 13 年 7 月 5 日 第 4 校時

場 所：熊本県阿蘇郡高森町立上色見小学校 4 年教室

児童数：男子 5 名、女子 5 名独立して行う名画の鑑賞はこれが初めての経験である。

また掲載する児童の意見・感想等は、授業中の児童の発言や授業終了後、ワークシートに書かれてあったことを集約したものである。一人一人の児童が様々な意見を述べているので、重複する意見もあったが、およそどの意見が何名程度いたかについても調べた。また集約したものに、授業者の視点から分析を加えた。

### (1) 題材についてーティツィアーノ作「三世代の寓意」

ティツィアーノの「三世代の寓意」は、画面の中に、たくさんの寓意（アレゴリー）と象徴（シンボル）が配されている。寓意とは、抽象的な観念を人物像で代理・表象したものであるが、この絵においては、二人の幼児と一人の天使、前景左側の若い男女、中景の二つのどくろを手にして黙想する老人がそうした寓意的人物像である。これらは人生の三つの段階ー誕生、青春、死、を寓意しているとも受け取れる重要なモチーフである。

本題材ではこの一つ一つのモチーフに対し、児童が考えやすいよう想定した発問を小刻みに繰り返す。そして児童が画面を十分に視覚分析したとき、寓意に関する知識を児童が理解可能な分だけ与える。そして画像分析の活動をする中で、児童が自分なりにこの作品に意味づけを行っていく。

### (2) 指導にあたって

①学習過程は「見る」「考える」の二段階とする。

②「見る」段階に重点を置き、それぞれのモチーフについて発問を行いながら、児童が視覚分析を行うヒントを与える。視覚分析をしながら、寓意に関して、簡単に説明する。そして、画中のどこにどんな寓意が置かれているのか考えさせる。（「見る」段階）

③画中に何が描かれているのか、ワークシートを活用して細部に渡り視覚分析させる。発問に対する児童なりの考え方を自由に出し合わせ、つきあわせていく。（「見る」段階）

④本時の学習で出てきた視覚分析結果や寓意に関する知識を考え合わせて簡単な作品の意味解釈を行わせる。特に三世代の寓意が画中において三角形に繋がっていることにどんな意味があるのか考えさせる。（「考える」段階）

- ⑤児童に与える情報はできるだけ視覚化し図表や年表にまとめる。児童が作品をよりよく見られるように図版を一人一枚ずつ配布する。また児童が考えをまとめやすいように、ワークシートを工夫する。



図1 ティツィアーノ「三世代の寓意」1515年頃  
スコットランド国立美術館所蔵

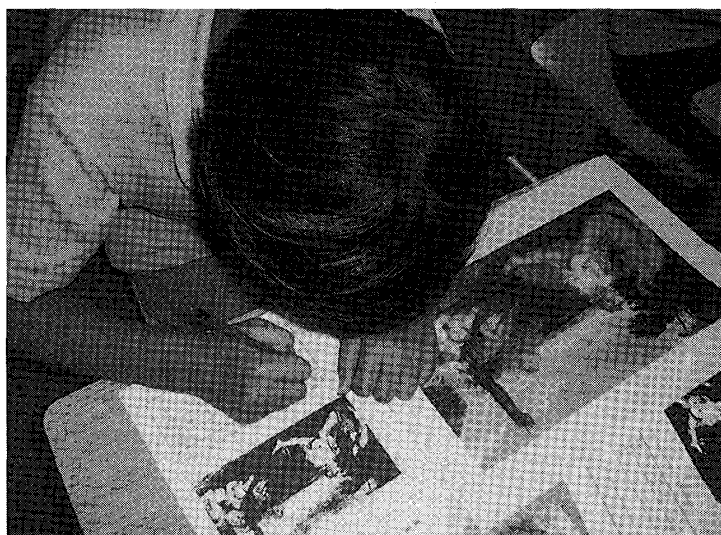


図2 ワークシートに記入する

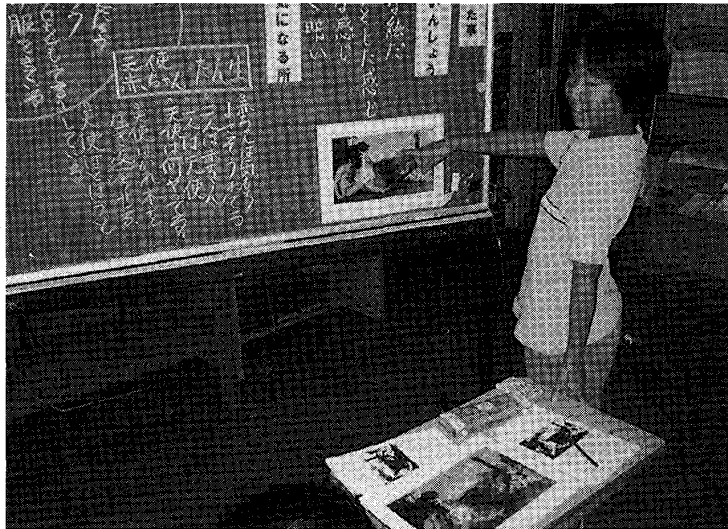


図3 発表の様子

## (3) 授業の実際

発問1: この絵を見て感じたこと、気がついたこと、ぎ問に思ったことなどを書きましょう。

## 全体的な印象

- ・ 不思議な絵だ。 (9名)
- ・ のんびりとした感じがする。 (5名)
- ・ リアルな感じの絵だ。 (5名)
- ・ 何となくくらい感じもする。 (3名)
- ・ 戦いの後みたいだ。 (3名)
- ・ 人物の後ろにいろいろなものが描いてある。 (1名)

## 気になる部分

## 画面右

- ・ 二人は赤ちゃんで、一人は天使。 (5名)
- ・ 枯れ木がある。木が途中で切れている。 (5名)
- ・ 赤ちゃんは気持ちよさそうに寝ている。 (3名)
- ・ 天使は何をやっているんだろう。 (3名)
- ・ 赤ちゃんが裸なのが気になる。 (2名)
- ・ 天使の羽の色が黒い。 (1名)
- ・ 後ろに鹿のような動物が描かれている。 (1名)

## 画面中央

- ・ 後ろのおじいさんは何者だろう。 (5名)
- ・ 後ろのおじいさんは何をしてるんだろう。 (5名)
- ・ なぜ手にどくろを持っているのだろう。 (4名)
- ・ 老人がピンクの服を着ているのが気になる。 (4名)
- ・ なぜ下を向いているのか。 (3名)
- ・ おじいさんはなぜ後ろに描かれているんだろう。 (3名)
- ・ 動物のようなものが描かれている。 (2名)

・後ろに家がひとつしかない。

(1名)

#### 画面左

・女の人が縦笛を二本持っているのはなぜだろう。

(8名)

・男の人が裸なのが気になる。

(7名)

・この若者(男)は一体誰だろう。

(4名)

・一人は裸で一人は服を着ているのはなぜだろう。

(3名)

・女の人のが服装が気になる。

(1名)

(教師による分析)


・作品を全体的に漠然と眺めた意見が多い。

・それぞれの人物の動きや服装に注目した意見が多い。ただし、各モチーフの細部までの観察は少ない。

・気になる部分の中では画面左側の若い男女に注目した意見が最も多かった。

鑑賞カード その1 月 日

年 名前



この絵を見て感じたこと、気がついたこと、疑問に思ったことなどを書きましょう。

全体的にこわいし、暗い。気になる所は、  
おじいさんが揺れているかいつか気になる。  
おじいさんのあぐらにあるていかい家か、気に  
な。女の人か、うっもリコーダーを持っているのか、  
気になる。ておくかい、うっも。あかちゃんか、  
ねている所にけ地面かいある。

図4 ワークシート記入例

鑑賞カード その2

年 名前

この絵を見て、次のことについて考えましょう。

1 画面左がわの男の人に女の人とはどんなことを語りかけているのでしょうか。

わたしの笛のねいろを聞いて。

2 若い男の人は今どんなことを考えているのでしょうか。この人の言葉で考えてみましょう。

そのあとぼくの笛のねいろも聞いて。

3 天使は木に手をついてなにをやっているのでしょうか。また赤ちゃんは今、何を考えているのでしょうか。

木の上ののぼって飛ぼうとしている。

4 うしろの老人は何をやっているのでしょうか。またどんなことを考えているのでしょうか。

かいこつを見ている。  
天国に行て何をしているのだろう。

図5 ワークシート記入例

発問2：この絵を見て、次のことについて考えましょう。

①画面左がわの男の人に女の人とはどんなことを語りかけているのでしょうか。

- ・「私と一緒に笛を吹こうよ。」 (5名)
- ・「元気出して！」 (5名)
- ・「私の笛の音色を聞いてよ。」 (3名)
- ・「目が覚めた？」 (3名)
- ・「あなた、どうしたの？」 (3名)

②若い男の人は今どんなことを考えているでしょう。この人の言葉で考えてみましょう。

- ・「いいよ。一緒に吹こう。」 (5名)
- ・「起こしてくれてありがとう。」 (5名)
- ・「ありがとう。君のおかげで元気になれそうだよ。」 (5名)
- ・「君が吹いた後、ぼくの笛の音色も聞いてよ。」 (3名)
- ・「愛してるよ。」 (3名)
- ・「ああ、体がだるいなあ。」 (2名)
- ・「君は誰？」 (2名)

③天使は木に手をついてなにをやっているでしょう。また赤ちゃんは今、何を考えているでしょう。

- ・天使は飛ばうとしている。 (6名)
- ・天使は枯れ木を生き返らせようとしている。 (5名)
- ・天使は「よく寝ているなあ。」と見守っている。 (5名)
- ・天使は「赤ちゃんと一緒に遊びたい」と思っている。 (4名)
- ・天使は体を休めている。 (4名)
- ・天使は木に登ろうとしている。 (3名)
- ・天使は木を倒そうとしている。 (2名)
- ・赤ちゃんは気持ちよさそうに寝ている。 (5名)
- ・赤ちゃんは「腹が減ったなあ。」と思っている。 (1名)

④うしろの老人は何をやっているのでしょうか。またどんなことを考えているのでしょうか。

- ・大切な人をなくし、思い出をじっとかみしめている。 (7名)
- ・悲しそうな表情をしている。 (5名)
- ・寂しそうだ。 (3名)
- ・大切な人が天国へ行って、どうしているだろう、と考えている。 (3名)
- ・家族や友人を返して欲しい、と思っている。 (2名)

(教師による分析)

- ・それぞれの寓意の表情、体の動き、持ち物、服装に注目して答えを出している。
- ・若い女性の動きは、「笛を吹く」「若い男性を起こす」の二つに分かれた。
- ・若い男性の言葉も「目ざめる」と「笛」という二つの意見に分かれた。
- ・天使は「木を生き返らせようとしている」という意見が多かった。
- ・後ろの老人は「大切な人をなくした悲しみ、思い出にふけている」という意見が多い。

指示 1: この作品の題名と「ぐうい」について聞きましょう。またそのぐういはこの作品の中のどこに、表されているか考えましょう。

- ・三世代とは人の一生の中の三つの時代のことである、ということ。
- ・寓意についての例示と説明

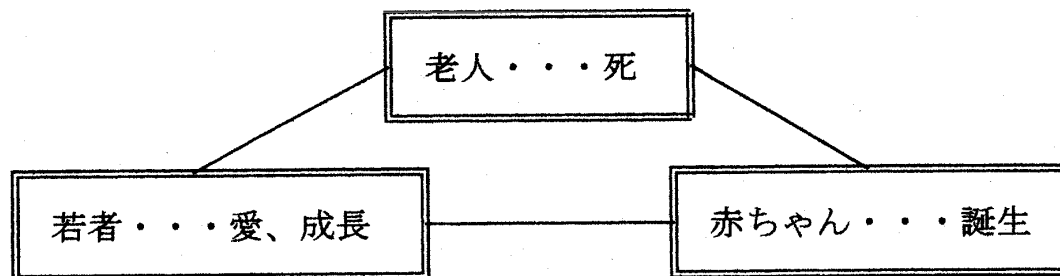


図6 児童が考えた寓意と作品の構図

発問 3: 今日の学習で、見たことや知ったことを考え合わせて、この絵にたいする、あなたの考え方をまとめましょう。

- ・ここに描かれているものは「命」そのものだ。(3名)
- ・人間は生まれて、成長して、死んで、また生まれ変わる。(3名)
- ・命は終わらない。つながるんだ。(3名)
- ・生きることは素晴らしい。(2名)
- ・人生には楽しいことや苦しいことがある。(2名)
- ・人生、山あり、谷ありさ。(1名)
- ・一年一年を大切に生きよう。(1名)
- ・人間はこんな人生を何度もおくるんだ。(1名)
- ・世界は終わらない。愛、再生。(1名)
- ・人や動物の命は必ずつながっているのだ。次の命を大切にしよう。(1名)

(教師による分析)

- ・「生命の循環」という意味づけをした児童が多い。すなわち、「死」で終わりではなく、それが新たな「生」へとつながっているのだ、と考えた児童が多い。
- ・「人の一生の中での、喜びや悲しみ」という意味づけをした児童も多い。それぞれの寓意の動きや表情、持ち物などからそれぞれの時代の考えや思いを自分なりに考えている。

指示 2: 今日の学習をおこなった感想を書きましょう。

- ・おもしろい授業だなと思った。(4名)
- ・自分なりには良い発表ができた。(4名)
- ・こういう絵を思いつくことはすごいなと思った。(3名)
- ・ティツィアーノは絵で全部を表している。命を無駄にして欲しくない、ということをみんなに伝えたかったんだと思う。(1名)
- ・命はつながっているんだ、とみんなに伝えたかったんだと思う。(1名)
- ・私は姉なんかにいじめられたら、「死にたい」なんて、いつも思っていたけど、この絵の鑑賞をして人生は「再生」「愛すること」など、いろいろあると思った。だからあまり「死ぬ」な



んて言わないようにしよう、と思った。

(1名)

・この絵は見た人に「命は終わらない」「一つのことをあきらめないでちゃんと生きて欲しい」ということを伝えたかった。

(1名)

・最初は意味の分からない絵だったけれど、最後には意味が分かった。

(1名)

・こんな人生を今から送るんだなあと思った。

(1名)

・「かわいそうだなあ」と思うところもあった。

(1名)

(教師による分析)

・「人の一生の中での、喜びや悲しみ」という意味づけを、自分の生活に投影して考えた意見が複数あらわれた。

・「人生」という概念を強く意識づけた児童が多い。

・「人生」「生命の循環」をこの絵のメッセージとして捉えた児童が多い。

#### (4) 本実践における成果と課題

##### 「見る」ことに関して

・この作品では大きく3種類の寓意的人物が画面にわかりやすく配置されている。しかも細部を分析すればするほど、寓意の持つ意味がより多く現れてくる。「三世代の寓意」のような視覚分析しやすく、なおかつ様々なヒントをあわせ持つ作品は「見る」ことを重視した鑑賞の授業に適している、といえる。

・発問に関して、最初の発問では「不思議な絵だ」というように全体を漠然ととらえた意見が多かった。しかし二番目の発問では「若い女性」では「二本の縦笛」、**「老人」**では「骸骨」、**「若い男性」**では「ねむそうな表情」というように、児童はそれぞれの寓意的人物の表情や、体の姿勢、持ち物などを判断の材料としてとらえている。このことから、具体性のある発問を行うことが、児童が画面の細部に目を向けることに役立つことがわかる。また、「見る」段階での発問に関しては、作品の全体的印象もふくめた作品の第一印象を話し合わせるような発問と、作品の細部に注目させるための具体的な視点を持った発問とを組み合わせることが、児童が「見る」上で有効性が高いといえる。

・授業中、児童は配られた図版に顔を近づけて観察し、非常に細かい部分にまで注意していた。児童が精密に画面を分析するためには、作品をよりよく見られるように図版を児童の手元に届けることが重要である。

##### 「考える」ことに関して

・「考える」段階で「生命の循環」「人の一生」がでてきたのは「見る」段階で画面を各モチーフに切り分けながら分析し、「寓意」という知識を与え、さらに画面上で確認したからである。このことから「見る」「考える」という学習過程は作品に対する児童なりの考察をさせる上で有効性が高い。

・この絵の意味作用を問う段階で、「生命の循環」「人の一生の中での、喜びや悲しみ」という意味づけをした児童が多い。このことから、児童が視覚的に分析した結果と「寓意」という知識を考えあわせて作品の構図を考え、論理的に作品の意味づけを行ったことがわかる。また、「生命の循環」という作品の意味づけを行った児童は視覚分析の段階で、「二本の縦笛+若い男女」から「愛」を導きだし、さらに寓意の概念から「青春」を導き出している。このことから作品の深い読みを実現させるためには、「考える」に至るまでのプロセスをより精密に行わせる必要があるといえる。

・児童に対して寓意の例示と説明を行った。そしてその後、画面の中での寓意の位置について確

認を行った。ここで画面上に寓意が三角形状に表されていることに気がついた児童が多い。「生命の循環」「人の一生」といった意味づけがでてきたのは、このような作品の骨組みが見えて来たからである。このように知識をただ単に与えるだけではなく、それらを一つ一つ画面で確認していくことが作品のより深い意味解釈につながるといえる。

- ・授業中の児童の発表は最後まで活発であった。また一人一人の発言はいい加減な考えからではなく、「こうだからこうだ」という論理的なものであった。児童の考えをまとめさせ、より論理的な話し合いをさせるためには、ワークシートに自分の考えをまとめさせるだけでなく、考えを纏めた上で話し合わせる事が重要である。

#### 4 おわりに

本実践研究のポイントは「見る」ことに重点をおいた授業展開をすること、および「見る」ことから「考える」ことへの移行をスムーズに行うことである。

「見る」ことに重点を置いた授業を成功させる要因の一つは、題材である鑑賞作品の適切な選択である。題材は、小学校中学年の児童の好奇心を刺激するような作品であることが望ましく、また、熱心な観察に耐えるに十分な視覚的情報量を持っているものでなければならない。本研究における題材の選択は成功したといえるだろう。なぜなら、「不思議な絵だ」という児童の反応は題材が児童の好奇心を捉えたことを物語っているし、作品における3つの寓意的人物群は適切な分量の視覚的情報量をもっているため、授業中の児童はかなり熱心に時間をかけて観察に取り組むことができたからである。

「見る」ことから「考える」ことへの移行に関しては、題材の含む解釈可能性の範囲が小学校中学年の児童の思考可能な範囲と何らかの程度、重なり合うことが必要である。本研究で取り上げた題材がこの点で適切であったことが、授業結果から証明された。児童たちは寓意に関する説明を待たずにすでに3つの寓意的人物群間を結びつけることができていたし、寓意に関して考察を促した後は、驚くべきことに多数の児童がさらに深い想念—「生命の循環」や「命・愛・死・再生」—にたどり着いたことを授業結果は示しているのである。

一般に、人生の初期段階に位置する小学生の時期は、好奇心の旺盛な時期である。好奇心は疑問を生じさせ、空想を掻き立てる。鑑賞学は、作品を緻密に「見る」ように促すことによって「疑問」を「問題発見力」へと結びつけ、「考える」ことの導入によって単なる「空想」を「論理に制御された想像力」へと高める。人生の基盤を構成する小学校段階において、こうした能力の発達を促す授業は必要性が高いものと考えられる。こうした授業をイメージ＝画像を通して行う鑑賞学は、小学校の授業全体の中で、他の学科では代替することのできない独自の位置を占めるものであると言わざるを得ない。

#### 参考文献

- 吉川 登、行為としての鑑賞—鑑賞学の序章としての鑑賞行為の分析—、大学美術教育学会誌 第25号、1993年。  
吉川 登、鑑賞学に関する指導事例、「教員養成系大学・学部における美術教育の課題と展望」

- p.39 ~ 40, 日本教育大学協会全国美術部門新教育課程検討特別委員会, 1997 年.
- 野上雅志,『鑑賞』再考－「見る」「知る」「考える」鑑賞授業－,「アート・エデュケーション」  
NO.30, 2000 年.
- Panofsky, E., Problems in Titian — Mostly Iconographic —, New York, 1969.
- Wethey, H.E., Titian vol.3 The Mythological & Historical Paintings, London,1975.
- Rosand, D.,Titian: His World and His Legacy, New York, 1982.
- Hetzer, Th., Tizian: Geschichte seiner Farbe, Frankfurt, 1935.
- Crowe & Cavalcaselle, Titian: His Life and Times, London, 1877.
- Pedrocco, F., Tiziano, Firenze, 1993. (邦訳: 池田亨「ティツィアーノ」東京書籍, 1995 年).